

## 4 鉄湯釜 2口 [有形文化財（工芸品）]

[所在地] 奈良市登大路町 48 番地

[所有者] 興福寺

[法 量] (北の湯釜) 口径 147.0 cm (南の湯釜) 口径 152.0 cm、高 125.0 cm

[時 代] 平安時代末期～鎌倉時代

[概 要]

興福寺の鉄湯釜 2 口は共に湯屋で使用された大形鉄湯釜で、現在大湯屋内に南北に並んで所在する。釜の形状は 2 口とも鑊のある羽釜だが、北の湯釜は鑊と胴のほとんどの部分を欠失しており、南の湯釜は鑊と鼎足<sup>かなえあし</sup> 1 本を欠失している。

北の湯釜は内傾する肩の形状などから平安時代末期から鎌倉時代の作、南の湯釜は胴幅の広い重厚な姿で肩から底部まで緩やかな曲面を描く形から鎌倉時代の作とみられる。共に年紀がなく鑄造年代の確定は難しいが、2 口を比較すると北の湯釜は陽鑄線が繊細で鑄造が薄いことから、南の湯釜を遡るものと考えられる。湯屋に関連する遺品は全国的にも少なく、県内では東大寺の鉄湯船が重文に指定されるのみである。本 2 口は寺院の湯屋で使用された大形什器<sup>じゅうき</sup>であるととも、中世以前の羽釜型湯釜の中でも最大の口径を測る遺品として貴重である。



手前が南の釜